ブラジル和道流空手道連盟
創立７０周年記念国際合宿・稽古を実施
大塚博紀３代宗家が来伯、直接指導

ブラジル和道流空手道連盟（高松浩セルジオ教士師範、７段）創立７０周年を記念した国際合宿・稽古が、１０月１０日、１１日、１２日の３日間にわたってパラナ州フランシスコ・ベルトラン市のUnipar体育館とサンパウロ市のSociedade Esportiva Palmeirasで開催され、日本の三代宗家である大塚博紀（ひろのり）最高師範が１０年ぶりにブラジルを訪問して自ら指導を行なった。

高松師範の話によると、１０日、１１両日のフランシスコ・ベルトラン市での国際合宿・稽古には地元パラナ州をはじめ、サンパウロ州やリオ・グランデ・ド・スル州などから３１２人の門下生が参加した。そのうち、１０歳前後の子供たちが約半数を占めたという。また、今回はアメリカ（カリフォルニア州オレンジ・カウンティ）から米国和道流空手道連盟教士師範の西村昭二氏と２人の黒帯のほか、エクアドルからも門下生が合流した。







１２日にサンパウロ市のSociedade Esportiva Palmeirasで行なわれた稽古では、パラナ州の合宿・稽古に出席できなかったサンパウロ州内に住む門下生ら約５０人が参加。大塚最高師範から基本動作として、体のひねり方や腰の落とし方など、直接指導を受けた。

　また、「ピンアン初段」「ピンアン二段」「ピンアン三段」「ピンアン四段」「ピンアン五段」の型、「基本組手」や「突き」などの指導が約３時間にわたって行なわれた。











そのほか、稽古の前後には協力者への感謝の気持ちを込めた表彰と記念品授与や記念撮影も行なわれた。

今回が初めてのブラジル訪問となった米国和道流空手道連盟教士師範の西村氏は、「子供たちが熱心に稽古の様子を見聞きしていたし、組織的で規律があってしっかりまとまっている」と感心していた。

大塚最高師範は「今回は特に、細かい体の動きなどに重点を置いて指導を行なった。和道流空手は難しい基本動作があり、１０年前に（ブラジルで教えた時）は出来なかった門下生たちが、この１０年間で継続して出来るようになっていたことに驚いた」と率直な感想を述べる。また、和道流空手について、試合に勝つためだけのスポーツ空手ではなく、「武道としての空手である」ことを強調。「ブラジルの門下生は皆、真面目で熱心な人が多い」と、肌で感じた思いを語っていた。

高松師範は「父（故・高松浩二ブラジル和道流空手道連盟範士師範9段）の時代から『努力すれば誰でも出来る空手』『試合の勝ち負けだけではなく、やればやるほど奥が深い一生稽古できる空手』を実践してきました。毎年２月に黒帯指導員と、７月の冬休みと年に２回の合宿・稽古を行なっていますが、今回もフランシスコ・ベルトラン市では市のスポーツ文化事業として副市長にも参加協力してもらいました。パラナとサンパウロで７０周年記念の国際合宿・稽古を無事に終えられたことにすべての皆様に感謝したいと思います」と話していた。

元サンパウロ新聞社　記者　松本浩治











